

Every extension of knowledge arises from making the conscious the unconscious.

## Library News

Our business in this world is not to succeed, but to continue to fail in good spirits.

What is done can be undone.  
Library News  
Time flies.  
Library News  
What is done can't be undone.

次を、次へ。



Meikeidai

contents

目次

特集

貴重本紹介

貴重本紹介シリーズ 4

## “The Theory of Harmonics” John Keeble, 1784 London



▲上記の図書は、本学図書館に所蔵されている1784年公開された初版本である。(ロンドン刊)

著者のジョン・キーブルはグローブ音楽辞典によると、1711年にイギリスで生まれ1786年同国ロンドンで没している。同辞典は彼をオルガニスト、理論家、作曲家として紹介している。作品にはオルガン曲集などがあったようだ。彼の生きた時代の作曲家としてはモーツァルト、ハイドン、晩年のヘンデル、バッハらがあり、音楽史上においては古典派の時代といえる。しかし音楽史的には全く無名の人物である。

ところで題名についてであるが、私が某書店の古書展で見たとときには「和声の理論」となっていた。時代としては古典派であり、私がかつて大学受験の時に学んだ和声も元は古典派の時代に完成された、所謂古典和声であった訳で、その時代に書かれた和声理論は一体どういう内容だったのかという興味もあって購入することにした。ところが私は慌て者で、帰宅してからよく見ると“Harmony”ではなく“Harmonics”と書かれているのがわかった。つまり和声の理論ではなく倍音の理論であった訳である。文字にしてみればほんのわずかな違いにすぎないが、内容は全く違っていると断言できる。慌て者の本屋め、と自分のことは棚に上げ、しかし嬉しくなったことを覚えている。なぜなら現代においては倍音にもとづく音組織の理論はそう珍しくない。しかし今から200年以上も昔のこととなると話は別である。現在我々はフーリエの理論による音の解析はよく承知している。しかし著者の時代では所謂自然倍音をもとにした知識と耳による経験にもとづかざるを得なかったと思う。本書を読むとすぐに理解できるのだが、倍音列のうちかなり低位の音を扱っている、というよりそうせざるを得なかったのだろう。そうして著者の音楽史的時代が古典派であったということも、彼の考えが三度和音に限定されていることと無関係ではない。結局著者は自らが日常使用している三度和音による機能と声理論の追認という結果で終わっている。

随想	2
法学部教授 若原紀代子	
国内外の図書館	3
短期大学部助教授 光松佐和子	
読書ガイド	4
法学部教授 岡 勝年	
人間生活科学部教授 山下 和雄	
経済学部講師 加藤 秀弥	
経営学部教授 丸山 祐一	
学生コーナー	6
短期大学部 伊藤 忍	
経済学部 横井 文誠	
人間生活科学部 浅田 祐一	
法学部 今井 昌宏	
図書館からのお知らせ	8



人間生活科学部 教授  
安藤 悦夫



## 読書が活きて



法学部 教授 若原紀代子

小学校低学年の頃より、本を読むのが好きだった。当時はテレビもなかったから、子供達は、外で遊ぶか、ラジオを聞か、読書ぐらいが楽しみであった。戦後の経済復興期であったが、まだ出版事情も悪く、粗悪な紙に印刷された『少年少女世界文学全集』を毎月一冊買ってもらうのが、何よりの喜びであった。買ってもらった日に読了してしまうので、次に買ってもらえる日を本当に指折り数えて待ち望んだものである。物の豊かな時代に育った人には、想像もできないことであろう。

小学4年生の頃に読んだ本のなかで、シェークスピアの『ヴェニスの商人』は、後年、大学で法律を学ぶことへの潜在的機縁になったような気がする。『ヴェニスの商人』の話はあまりにも有名であるが、シャイロックという高利貸しがアントニオなるヴェニスの貴族にお金を貸してくれと頼まれ、返済期限までに借金を返さないときはアントニオの胸部から肉1ポンド(約453グラム)を切り取る約束でお金を貸す、ところがアントニオは、想定外の事態が発生して借金を約束の期限までに返済できず、シャイロックが契約通りの履行、すなわち肉塊1ポンドの切り取りを求めて法廷で争うという裁判劇である。裁判官ダニエル(実はアントニオの親友の恋人・ポーシャが変装)は、1ポンドの肉は法律により汝シャイロックのものなり、しからば切れと宣言して肉の切り取りを認める。勝ち誇ったシャイロックが狡猾な笑みを浮かべて左手に秤、右手に短刀をもって迫るその瞬間、裁判官は次のようにいう。契約は肉1ポンドである、たとえ一滴たりとも血を流すことは許されぬぞ、と。結局、シャイロックは、なす術もなくついに兜をぬぐ。ここで、読者(観客)は、ほっと安心する(観客は拍手喝采)。

これが、『ヴェニスの商人』のクライマックスである。裁判官が女性の変装という設定も、大いに気に入った。

シェークスピアのこの裁判劇については、古くから論争があったらしい。特に判決理由をめぐって、イエーリングをはじめ多くの法律家が非難していることを、大学生になって知った。あのような契約を有効と認めたいうで、血を流さず肉を切り取れというのは、三百代言的な挙げ足取りであって、合理的な判決とは言い難いというのである。今日的な法解釈としては、公序良俗に反する事項を目的とする契約であるから、契約そのものを無効とすべきである、ということになるのか。これに対し、『ヴェニスの商人』の時代では、「契約は遵守しなければならない(契約の拘束力)」ということが不動の規範として社会に認められていたのであるから、あの判決理由はやむを得ないのであって評価できる、とのコーラーの擁護論もある(詳細は、勝本正晃著『文芸と法律』国立書院刊を参照されたい。大変興味深い著書である)。いずれにしても、文芸作品について法律論争とは大人げないと思うが、そこが、シェークスピアのシェークスピア劇たる所以であろう。あのような筋立てだからこそ、一般民衆に大受けしたのである。これまで、契約法の諸問題を研究テーマとしてきたが、現代法においても、契約の拘束力の問題は、まさに、その出発点である。

中学生の時読んだ志賀直哉の『暗夜行路』は、その後何回か読み返した。親子関係や嫡出性否認の制度を考える際に、主人公の心情を思い出す。読書は時期や状況によって感じ方や捉え方も違い、自らのイメージも膨らむ。



## ノースカロライナ州立大学 テキスタイル図書館 NCSU Burlington Textile Library

短期大学部 助教授 光松佐和子



▲College of Textiles 外観

ノースカロライナ州立大学 (NCSU) はアメリカ南東部、ノースカロライナ州の州都 Raleigh にあります。キャンパスは Raleigh 湖と深い緑に囲まれた閑静なエリアに位置しています。私は1年間、NCSU の College of Textile に研究留学していました。NCSU テキスタイル学部独自の図書館 “Burlington Textile Library” は大学創立 100 周年を記念して建設された Centennial Campus の学部棟 4 階にあります。開館時間はセメスターや試験週間、休暇等によって異なりますが、基本的には午前 7 時半から午後 11 時までで、土日も開館しています。学外関係者でも手続きなしで閲覧可能で、建物内に数箇所ある自販機でプリペイドカードを購入すればコピーもでき、登録すれば貸出もできます。蔵書データはインターネットで検索できますし、雑誌等については学内のパソコンからオンラインで電子ジャーナルを閲覧し、プリントアウトも可能です。また My library という利用者が自分の利用傾向に即してポータルページをカスタマイズできるサービスがあり、パーソナライズ機能の充実を実感しました。さらに、近辺のリサーチ・トライアングルと呼ばれる三角形のエリアに位置する NCSU、ノースカロライナ大学チャペルヒル校およびデューク大学の三

ノースカロライナ州立大学 (NCSU) はアメリカ南東部、ノースカロライナ州の州都 Raleigh にあります。キャン

大学間での協力体制が整っており、図書館の書籍を相互に貸借することができました。このテキスタイル学部は信州大学の繊維学部と提携しているため、繊維学会誌など日本の繊維関係の学術雑誌も何種類か陳列してありました。徒歩 10 分ほどの距離にある Main Campus の D. H. Hill Library にも足を運びましたが、こちらは圧倒的な蔵書数を誇る大規模で機能的な図書館というイメージでした。それに対して Burlington Textile Library は壁面に学生が作成したオリジナリティあふれるデザイン画や手織りのテキスタイルなどが展示されていて、アットホームな独特の雰囲気にも包まれていました。研究室からでも書籍の検索は可能ですが、この図書館の閲覧室で昼夜問わず熱心に勉強している各国の学生たちの雰囲気が大変気に入って、留学時代はほぼ毎日訪れ、時間を忘れて本を読んだり、文献と格闘したりした記憶があります。また担当教授の任意ですが、毎回の講義内容が DVD に記録され、図書館内の視聴覚室に設置されているため、いつでも自由に室内で授業内容の確認をすることができます。英語が十分に聞き取れず苦勞した私はこの DVD にずいぶん助けられました。



▲図書室内の風景



▲Burlington Libraryから見える Campusの光景

## 宮地 伝三郎 著『アユの話』

(226 頁) (岩波新書)

## 高橋 勇男 + 東 健作 著『アユの本』

(265 頁) (築地書館)



法学部 教授  
岡 勝年



『アユの話』は、1951年度の課題として、水産庁より「川へ放流するアユ苗の密度の基準」に関する研究を委託された、京都大学理学部教授である著者が、学生の補助を得て京都府下の山間部を流れる上桂川を調査河川に選び、アユが“なわばり (Territory)”をもつ特性を応用して、まず、瀬におけるアユの「生息可能密度」をわり出す。次いで、1954年度には、府下を流れる牧川と上桂川を選び、“なわばり”をもたないといわれる淵におけるアユの「生息可能密度」を推算する。さらに、1955年度には、府下の最北端に位置し、日本海に注ぐ宇川を選んで、遡上から産卵・孵化にいたる、四季を通じてのアユ(鮎・年魚)の生活史を詳細に究明している。

後半においては、「びわ湖の“アユ苗”」と題して、最初に琵琶湖のアユ(湖産アユ)を他の河川に放流して現在の基礎を築いた、石川千代松元東大農学部教授の業績にも触れている。まさに名著と言うに相応しい書物である。

近年、アユが獲れなくなった。40余年の友釣り経験のある筆者も、ここ10年ぐらいつれな話ばかりである。そこで、次に紹介するのが、その点に言及した『アユの本』である。

本書は、夏から翌年の春にいたる四季をとおしてのアユの生態を詳細にわかりやすく解説している。その中で、近年の不漁の原因は、カワウによる物理的アユ数の減少、1990年代後半に全国的に広がった冷水病によるアユの減少、(河口)堰等の構造物による遡上の阻害、等が指摘されている。結局、「漁協が元気な川にアユがいる」ということらしい。

## J T Hansen, B M Koeppen 著

相磯 貞和、渡辺修一 訳

## 『ネッター解剖生理学アトラス』

(222 頁) (南江堂)



人間生活科学部 教授  
山下 和雄



「ネッター解剖生理学アトラス」は“Netter's Atlas of Human Physiology”の翻訳書である(相磯貞和・渡辺修一共訳・南江堂)。原著の標題を直訳すると「解剖」という言葉は出てこない。しかし、機能(生理学)は構造(解剖学)の無いところには存在しない。したがって、生理学の成書のかかなりの部分は「解剖学」から成り立っている。医学・歯学以外の医療系教育においては、これを統一して、「解剖生理学」という教育科目を採用しているところが多い。管理栄養士養成大学もこれに準じて、人体の構造と機能を合わせて講じている。本書はこのような分野の人たちに適切な内容と分かりやすさを与えてくれる。

この書は画家であり、医師であったネッター博士が、CIBA Pharmaceutical社(現在Novartis Pharmaceuticals社)と45年に及ぶ共同事業によって生み出された2万以上の図(The Netter Collection of Medical Illustrations)から精選されたものをもとにJ T HansenとB M Koeppenが生理学を鳥瞰(著者らは「上空30,000フィートからの眺め」と言っている)するため企画・解説した、もともとは人体生理学のアトラスである。

F H ネッターは1906年ニューヨークに生まれ、今年は奇しくも生誕100年にあたる。はじめデザインを学んだのちに、ニューヨーク大学医学部を卒業、外科医になったが、上記CIBA Pharmaceutical社との共同事業を進め、世界中の医師、歯科医師、医療関係者に広く知られるすばらしい医学図譜のコレクションを完成するにいたった。ネッターは1991年生涯を閉じたが、Icon Learning System社がコレクションの権利を買い、その画風を引き継いだ人たちにより、現在の研究成果を取り入れて画像のアップデートと新しいイラストレーションの作成が続けられている。本書の図も協力者により学問的な裏づけがなされており、決して学問的に古くないものになっている。

本書はネッターの図を生かして肉眼観察(鳥瞰)から分子生物学にいたるまで、構造と機能を追及しており、最新の知見を含んでいるので初学者はもとより、すでに解剖生理学を学んだ人たちも本書からより深いところを理解できるような拡がりをもっている。本書は本書図書館に5冊導入されているので、管理栄養学科の学生のみならず、ひろく学生・教職員諸賢にまずは手にとって眺めていただくことを願っている。

## 読書ガイド

読書ガイドでご紹介した本は図書館にあります。ぜひご一読ください。

大竹 文雄 著  
『経済学的思考のセンス』  
(232 頁) (中央公論新社)



経済学部 講師  
加藤 秀弥

経済学になじみのない方に経済学のイメージを聞くと、「どのような株を買えば儲けることができるのか」や「どのように資産運用することが好ましいのか」といったことを学ぶ（あるいは研究する）学問であるというイメージを持っているように思われる。ところが、実際に経済学の教科書にはそれらに関する記述は皆無であり、経済学という学問が一般的に正確に認識されているとは言いがたい。

そのような現状を鑑み、本書は、経済学の教科書で頻繁に登場する「需要」、「供給」といった抽象的・理論的な議論を用いることなく、非常に身近な事例を用いて経済学的考え方を理解してもらおうという趣旨を持っている。前半では「女性はなぜ背の高い男性を好むのか」、「プロ野球の監督の評価」、「人は節税のために長生きするか」など、一見すると経済学と全く関係のない問題を取り上げている。その一方、後半では「年金」、「高齢化」、「賃金格差」など、現在重要な問題となっている「所得格差と再分配」について取り上げている。

本書の特徴は、以下の2点である。まず、興味深い問題に対してしっかりしたデータを紹介することにより、経済学の本質（インセンティブや因果関係）を分かりやすく説明していることである。次に、最先端の研究についても紹介されており、経済学の関心がいかなるところにあるのかについても述べていることである。

経済学に関心がある人もない人も、本書を読むことで経済学の奥深さを味わってもらいたい。この本により経済学に関心をもたれた方は、同じコンセプトで書かれた『ヤバい経済学』（東洋経済新報社）も読まれると、さらに経済学の面白さを理解してもらえるであろう。



斎藤 慎 著  
『社会起業家』  
(246 頁) (岩波新書)



経営学部 教授  
丸山 祐一

最近社会的に大きく注目された出来事として、投機社会や利益至上主義をたんてきに示す「村上ファンド」や「ホリエモン」をめぐる出来事があった。企業価値＝株価上昇こそ経営者の責任であるとし、各経営者が競争してその実現を目指すことにより日本の経済・社会が活性化すると彼らは主張する。経済・社会の発展は、企業の利益追求を目的とする自由な競争により実現するという考えは、古くからある考えである。わが国においても、財界・政府は、この考え方に立ち行動している。しかし、今日その矛盾・ひずみが深刻なものとして現出している。

さて、ここで皆さんに一読をすすめたのが、斎藤 慎『社会起業家』という本である。本書は、これからの社会における企業・ビジネスの在り方について、村上氏や堀江氏とは大きく異なる考え・見方を平易に示している。タイトルの「社会起業家」であるが、社会起業家は現実の企業社会から生まれ、企業社会の在り方を大きく革新しようとしている。本書によれば「社会起業家」とは次のような性格を持つ。

- 1 「自分に与えられた人生を価値あるものにしたいと考えている人たち」(同書、3 ページ)
- 2 「社会や環境や人権など、地球規模の課題や地域社会が抱える課題に対して使命感を持って挑み、事業を行なっている」(同書、3 ページ)

このような「社会起業家」は、同時に管理や組織に対して合理的・科学的技法を駆使しようとしている。いわば合理性と道徳・倫理とを統合し新しいタイプの企業を目指す潮流である。しかもこのような潮流は世界的なものであり、またわが国においても展開されていることをこの書は示している。



池田香代子再話 C.ダグラス・ラミス対訳 『世界がもし100人の村だったら』を読んで

短期大学部 伊藤 忍

**初めて** この本を見たとき、サイズが小さく、本の厚さも薄い、しかも、中の文章をパラッと見れば字が大きい！これだったら本を読むことが苦手な私でも抵抗なく読めるかなと軽い気持ちで読み始めました。実際この本を最後まで読み終えたときは、入り口の安易なイメージとは打って変わり、その内容の濃さに驚かされました。この世界には、裕福な人がいるかと思えば、逆に貧しさからまともな水さえも飲めない人がいることを改めて知らされました。「世界がもし100人の村だったら80%の富を20人が分け合い、20%の富を80人が分け合う」と、この本に書いてあったことがとても印象的でした。特に「20%の富を80人が分け合う」という表現を見て、とても衝撃を受けました。私は日本人とし

て生まれてきて何不自由なく暮らしているけれど、この20%の富を80人が分け合っているところで暮らして困っている人々に対して、私は何もしてあげられない。だからといって今すぐ行動できるわけでもない。自分の無力さを感じました。でもこの本の最後に、「このメッセージを最後まで読みきれたあなたは、2倍も3倍も幸せです」と書いてありました。こんなに自分が無力なのに、この本を読むことによって、何か幸せをもらえた気がしました。最初は軽い気持ちで読み始めた本でしたが、この本との出会いを通して、世界の現状をもっと知りたいという気持ちになりました。そして、こんな私でも何か役に立つことを見つけないかという気持ちになりました。



市川拓司著 『恋愛写真—もうひとつの物語』を読んで

経済学部 横井 丈誠

**たとえ** 短い時間でも幸せに、楽しく、懸命に生きた時間とは、一生に匹敵するほどのものを自分に残してくれると感じた作品だった。

大学生の主人公の前に現れた同い年の女性。彼女は成長がある時期で止まってしまうという病にかかっていた。しかし、その病は恋をすることで一時的に解かれ、一気に彼女は成熟した。その後には彼女は先の季節を知ることなく、まるで蜻蛉のように足早に彼の前から去っていく。病を患いながらも彼女は彼を愛し、今を生きることを選んだのだった。

二人は写真という趣味を通じて、仲を深めていく。主人公は女性の病のことは知らず、ずっとこのまま楽しい時間が続くものと思っていた。彼女が亡くなってから全て

を知った彼は、出会ってしまったことを嘆いた。しかし、彼女が亡くなるまでに撮ったであろう写真には、彼女が生きた軌跡が鮮明に映し出されていた。彼女は、数年間の幸せな時間を過ごしたことで、一生分にも違わぬ幸せを手に入れたのだと、僕は思った。主人公と出会わなければ、彼女の幸せは叶わなかったかもしれない。彼も彼女に出会えたことを忘れないよう、その写真の姿を胸に刻み込んだ。

僕も楽しい時間を過ごしている「今」を大切にしようと思う。後に振り返ったときには、楽しい気持ちになれるように、これからも過ごしていきたいと心から思った。



学

生

コ

1

ナ

1

## 名経大図書館への想いと大学図書館の未来像

人間生活科学部 浅田 祐一

**私が**名経に入学する際の決め手の一つがこの図書館の設備の良さであった。入学前に図書館を訪れたが、そのきれいさや専門書の充実度を目の当たりにして、以前在籍していた筑波大学の図書館に似ており、「ここで勉強したい!」と強く思ったのを今でも覚えている。入学してからも、図書館で栄養学や医学の専門書に囲まれて勉強できる幸せに毎日閉館の8時まで勉強したものである。最近自宅に専門書を購入して前よりも利用頻度が減ったが、やはり図書館で勉強する充実感には他には代え難いものがある。二期工事による図書館の増築が待たれるが、それに関連して日本の大学図書館の未来像をここで考えてみたい。

大学図書館とは、最高学府である大学にとって、先人が残した膨大な「知の遺産」

へ本をとおしてアクセスできる重要な施設・組織である。その利用において学生や教員が手に入れたいと思う知識(本)へすみやかにたどりつけるのが理想と言える。現在の日本の大学図書館はIT化による検索などは充実したが、自分の調べたいと思う事項にぴったりの本を探しあてるのはまだ難しい。その点、欧米の大学図書館では、その学問の専門を修めた人が司書となるため、利用者の求めたい知識にあった本を紹介してくれるようになっている。分野の専門家が本や利用法を教えてくれるほどありがたいことはない。日本の大学図書館もこのように改善されていけば学問水準のより一層の飛躍が期待できると思う次第である。



## ダン・ブラウン著『ダ・ヴィンチ・コード』を読んで

法学部 今井 昌宏

**流行に**乗って、最近話題の『ダ・ヴィンチ・コード』を読みました。映画は観ていないのですが、「これは観ないほうがいいんじゃないか?」と、根拠も無しに思うほど面白く、想像力を駆り立てられずにはいられない一冊でした。

『世界が覆るほどの秘密』というキャッチコピーがあるように、キリスト教がこの千数百年、全世界に隠し通してきた秘密を、かのレオナルド・ダ・ヴィンチが自らの作品に描き、後世に伝えようとしているのを突き止めるというのがこの本のあらすじです。

禁忌とも言うべき宗教の秘密を暴くこと、その秘密を守る秘密結社、それらに屈せず研究を続ける研究者たち。でも、一番惹かれたのは、ダ・ヴィンチの奇想天外、奇妙奇天烈なその思考です。作中でも、ダ・

ヴィンチの『天才』ぶりは見て取れます。鏡文字をはじめ、今の医療の原点とも言える詳細な人体解剖図。そして当時の技術力を遥かに凌駕した発明の数々。ダ・ヴィンチは画家でありながら科学者であり、技術者であり、探求者であり、究極の遊び心を持った偉人であり、異人なのです。

そんなダ・ヴィンチに憧れる反面、「こんな人にはなりたくない」と思う気持ちがあります。

この本を読んで思ったことが、一度でいいから、ルーヴル美術館やこの作中に出てきた教会や建造物などを回ってみたい、ということです。



# お知らせ Information

Our business in this world is not to succeed, but to continue to fall in good spirits.

What is done can't be undone.  
Time flies.  
What is done can't be undone.



## ■市邨学園 100周年 一図書館のあゆみー

今年、市邨学園は100周年を迎えました。学園の発展と共に図書館も大きく変化してまいりました。1965年(昭和40年)短大発足と同時に図書館開設。1975年(昭和50年)市邨記念図書館(現 情報センター)の竣工、そして蔵書数の増加・情報環境の多様化に伴い2000年(平成12年)に現図書館を開設、移転しました。館内システムの活用推進、開館時間の延長、図書館ホームページの公開、地域住民の方々への開放等、さまざまな発展を遂げてきました。

図書館は大学における学術資料の宝庫として、学生や教員の学習・教育・研究活動に不可欠な存在です。本学図書館はこれからも、学術情報の収集・蓄積・管理・利用の推進に貢献していく所存です。



現図書館

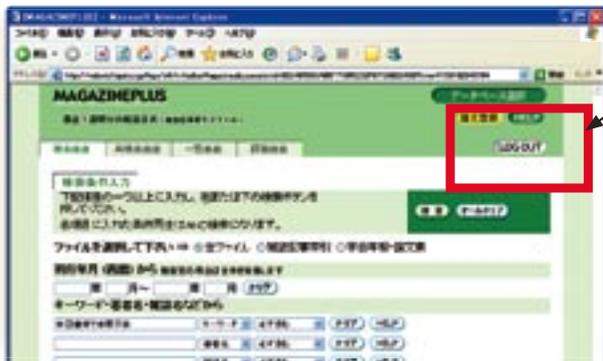


旧図書館

## ■名古屋経済大学図書館ホームページからのご案内

### ●インターネット・データベースの内、MAGAZINEPLUS を紹介します。

図書館HPのデータベース → NICHIGAI/WEBサービス・メニュー選択画面 [NKU] MAGAZINEPLUS をクリックすると、下のページが表示されます。



●利用終了後は必ず「LOGOUT」をクリックしてください。

### MAGAZINEPLUS とは

一般誌から専門誌・大学紀要、海外誌紙まで収録した日本最大規模のデータベースです。  
1945年からの半世紀の出来事を一括検索することが可能です。

図書館2階パソコンコーナー・情報センター・サテライト・研究室より利用できます。  
なお、図書館2階～5階のOPAC検索端末からは利用できません。

**MAGAZINEPLUS** 検索結果から図書館OPACでその資料があるかどうか確認してください。

図書館だより Vol.52 2006.11

発行所 名古屋経済大学 図書館 〒484-0000 愛知県犬山市樋池61-22 TEL (0568) 67-3798 (代)  
名古屋経済大学短期大学部 ホームページ <http://www.nagoya-ku.ac.jp/lib/index.html>  
発行年 2回  
印刷所 株式会社 一誠社 TEL (052) 851-1171

(「図書館だより」は本学図書館ホームページでもご覧いただけます)